



TITLE:

日本化学工業の技術史的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

中村, 忠一

CITATION:

中村, 忠一. 日本化学工業の技術史的研究. 京都大学, 1966, 経済学博士

ISSUE DATE:

1966-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212030>

RIGHT:

【 13 】

氏 名	中 村 忠 一 なか むら ちゆう いち
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 11 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	日本化学工業の技術史的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 堀 江 英 一 教 授 大 野 英 二 教 授 田 杉 競

論 文 内 容 の 要 旨

主論文は参考論文『日本化学工業史』の主題を経済学的・経営学的視点から把握しなおそうとするものである。参考論文は明治以降の日本の近代的化学工業の発展を技術的発展過程の側面からとらえた日本化学工業技術史であったが、主論文はこの技術史的研究を基礎において、「企業がいかなる最新の技術を把握することによって、ビッグ・ビジネスとしての物質的基盤を確立してきたか」という「企業の技術的基盤掌握の歴史」という視点から、日本化学工業技術史を日本の化学企業の発展史の一つの側面に具体化する。こうして参考論文の主題であった日本化学工業技術史研究は、主論文の主題である日本の化学工業とくに化学企業発展史に内包されることになっている。

主論文は、「企業の技術的基盤掌握の歴史」という主題を化学工業技術の特殊性に照応して、現在の化学企業の特徴的形態であるコンビナートの形成・確立過程として把握している。すなわち主論文の構成—「第1章発端と断層」(維新～日露戦争)・「第2章 近代化学コンビナート形成の基礎過程」(第一次世界大戦まで)・「第3章 近代的化学コンビナートの成立」(第二次世界大戦まで)・「第4章 近代的化学コンビナートの体系化」(1955年まで)・「第5章 化学独占と石油＝化学コンビナート」(現在まで)—は、化学工業技術の発展とそれの日本への導入に照応して、これを掌握した企業がビッグ・ビジネスとなり、次第に近代的化学コンビナートの体系をととのえつつ、現代の化学コンビナートを確立していく過程を歴史的に追求している。

主論文の主要な力点は、言うまでもなく、第一次世界大戦以後の日本における化学工業技術の展開と化学工業のコンビナート化の発展におかれている。そのうちから主要な論点をあげてみる。第一次世界大戦中およびそれ以後、余剰電力を利用して電気＝化学コンビナートの基礎をつくっていく新興コンツェルンの抬頭と石炭を起点とする石炭＝化学コンビナートの基礎をつくってゆく旧財閥の対応との対立する二つの化学コンビナートの成立が追求され(第3章)、それが、1930年以後には、いよいよ新興コンツェルンの電気＝化学コンビナートと旧財閥の石炭＝化学コンビナートとの対立する二つの「体系化」された近代

的化学コンビナートとして確立され、しかも徐々に後者が優位になってゆき（第4章）、最後に1955年以後の石油を起点とする石油＝化学コンビナートへの再編成過程で、旧財閥が巨大なそれぞれのコンビナートに再結集し、旧新興コンツェルンが解体しつつも石油精製企業を中核とするコンビナートに編成され、しかもそれぞれのコンビナートが国際巨大資本の系列に編入される過程が追求されている（第5章）。

論文審査の結果の要旨

（1）参考論文は、明治以降の日本の化学技術の全発展を、体系的に、かなり克明に追求している。こうした化学技術史の研究は日本化学工業史研究にかくことのできないものでありながら、同時に経済学研究者には困難な作業であるが、著者はこの困難な基礎作業に相当な成果をあげている。（2）主論文は、さらに、この化学技術史研究を、「企業の技術的基盤掌握の歴史」として、企業史の基礎的側面にとらえなおし、現代企業の特徴であるビッグ・ビジネス、とくにコンビナートの形成をあきらかにしているが、主論文はこうしてビッグ・ビジネス、とくにコンビナートの形成の技術的側面についての数少ない体系的な研究である。著者の、化学技術史研究から企業史研究へと上昇する研究方法および研究内容は、妥当であり、しかも体系的である点で、学界に益するところが多く、経済学博士を授与するに充分であると認める。

以上のように、著者の研究はすぐれたものではあるが、企業は技術的過程を基礎としながらも、技術的側面だけで成立するものではありえない。企業は、資本を調達し、生産を組織して価値を生産し、価値を実現しなければならず、そのためにはそれぞれの過程を合理的に管理しなければならないが、そこにビッグ・ビジネス、コンビナートに特殊な現代的な経済学的・経営学的研究課題が成立している。著者の研究は、こうした経済学的・経営学的研究の本来の分野にまで上昇しておらず、そのための基礎条件の作業になおとどまっている。本来の企業史研究にすすむための基礎作業として十分な成果をあげていると認めて、さきの認定をする。